S-2

新村出と歴史言語学*

アダム・キャット（京都大学）

1　新村出と印欧語比較言語学

(1)　新村は『広辞苑』の序文で，辞書の編集に携わった次男猛について次のように記している。

「現代の国語に対する知識と感覚とについては，当然長所の在ることは認めてよろしく，その点において，むしろ語史にのみ傾倒せる編者の粗慢な一方面を補佐してくれたことを付言したい。また，グリム兄弟の場合とは，全く違った情味が存する。」

(2) グリム兄弟が成し遂げた仕事は，新村にとって重要な模範であっただろう。グリムの自分への影響について，彼はこう述べている。

「ヤコブ・グリムは，ドイツの言語の歴史を文献的に，あるいは方言研究的に究めて，あるいは言語史，あるいは『ドイツ文典』などを編纂して言語学草創時分の三大偉人の一人であったんで，私の研究は，歴史的研究にせよ，現代語の研究にせよ，グリムの学風に従って徐々に自分の研究を進めて行きました。」（新村 2017: 70）

(3) 「グリムの法則」について， 新村は『言語学雑誌』（1900年〜1901年）に論文を連載し，グリムを正式に日本に紹介したものとしてこれが初めてと思われる（新村 2017: 69–70）。

(4) また，三十代の新村が1907年から1909年まで欧州に留学した際，彼はハーナウ，カッセル，マールブルクとゲッチンゲンを訪問し，グリム兄弟の跡をたどる思いがあったことが窺われる（新村 2017: 70）。

(5) 留学中，新村はベルリン大学で一年間言語学の講義を聴講し，ドイツ，オランダ，イギリス，パリなど，欧州の各地を巡り，ジーファースやブルークマンなどの著名な言語学者の講義を受けた（新村 2017: 63–76）。

(6) 実は，新村が留学した時期はトカラ語研究が始まった時期でもある。1904年から1905年にかけてドイツの探検隊がトルファン周辺などの遺跡を調査し，未知の言語で記された写本をベルリン大学に持ち帰った。

(7) ベルリン大学で博士号を取ったサンスクリット語学者 Emil Sieg (1866–1951) と Wilhelm Siegling (1880–1946) は，1906年に Richard Pischel 教授 (1849–1908) にその写本の研究を委託され，わずか二年で写本の解読に成功した。

(8) その解読の成果は1908年の論文, “Tocharisch, die Sprache der Indoskythen. Vorläufige Bemerkungen über eine bisher unbekannte indogermanische Literatursprache” として発表された。この論文で，トカラ語が印欧語に属することや，二種類の言語（トカラ語 A とトカラ語 B）の存在，文字の読み方，音韻，形態の問題点などが明らかとなった。

(9) 本発表では，トカラ語を簡単に紹介し，近年の進歩の例とこれからの課題をいくつか挙げる。

---

* 本発表は JSPS 科学研究費【基盤研究（C）】「A Sanskrit-Tocharian Dictionary Project」（課題番号 18K00573）の助成を受けたものである。

2　辻直四郎とトカラ語研究

(10) トカラ語が最初に日本に本格的に紹介されたのは，辻直四郎の1935年の論文，“On the Designation-Problem of the So-called Tokharian Language” である。「トカラ」という言語の命名の問題のほか，辻はこの論文に「Short bibliography for the students of the Arshian (= Tocharian) language」というわりと詳しい付録を付けている。

(11) また，続く1953年の論文『トカラ語研究の近況』では，辻はトカラ語の命名問題，印欧語中における位置，原典の出版および翻訳，文法・単語の研究や辞書・語彙についての研究を広く紹介している。その中で，辻は次のように述べている。

「本文の執筆を躊躇したのは，1940年以来，外国書ことに学術雑誌の入手が困難となり，現在においてもなおその不便が解消されていないので，到底すべての文献を直接利用することができないのを予感したからである。最近の研究に関し，見落しの多いことを恐れるが，現時のトカラ語学界の動向を知るに重要な著作・論文を列挙し，問題点を明らかにする上に大過がなければ幸甚である。」（辻 1953: 101–102）

3　トカラ語について

(12) トカラ語派は二つの言語（トカラ語 Aとトカラ語 B）から成り，印欧語の一つであることが 20 世紀初頭にはじめて知られた。

(13) トカラ語はタリム盆地の周辺で発見された，紀元後 6 ~ 8 世紀に記された写本などから知られている。資料の大部分はブラーフミー文字で書かれた仏教文献である。

(14) トカラ語の資料は少なくとも 7600 点あるが，そのうちの約 5600 点は断片に過ぎない（Malzahn 2007: 79）。

(15) トカラ語は centum 系言語であり，アナトリア語派と共通して保存されている独自の古い言語特徴からアナトリア語派の次に印欧祖語から離脱したと考えられている（吉田 2005: 124–125）。

(16) 古い形態的特徴。サンスクリット語の *áhārṣam* ‘I took’ のように，全ての人称において接辞 *-s-* を持つ sigmatic aorist は多くの印欧語に見られるが，ヒッタイト語とトカラ語ではこの接辞は3人称単数にしか見られない。

(17) この状況を sigmatic aorist に発展する前の段階とみなしている研究（Jasanoff 2003, Yoshida forthcoming など）がある。

(18) 古い語彙的特徴（Kim 2012: §7）

- Proto-Indo-European $*h_3eb^h$- **‘enter’** > TA *yäw*-, TB *yäp*- ‘enter’; Hieroglyphic Luvian *iba*- ‘west’
  - vs. Inner IE **‘fuck’**: Vedic *yábhati*, Greek *oíphō*, Old Church Slavonic *jebǫ*
- Proto-Indo-European $*(h_1)\bar{e}h_2g^{wh}$- ‘drink’ > TA/TB *yok*- ‘drink’, Hittite *eku*- ‘drink’
  - vs. Inner IE $*peh_3$- ‘drink’: Vedic *píbati*, Latin *bibō*

4　近年の進歩

4.1　例 I：トカラ語 B 写本の時代区分

(19) 言語および文字の特徴からしてトカラ語 A は B よりはるかに均質である。

(20)トカラ語 B のテキストは豊富な文字・形態・音韻のバリエーションを示しているということはトカラ語研究の早い段階から指摘されていた。Sieg & Siegling は彼らのテキストエディションの中で幾つかの写本が “older ductus” を示していると観察している。この古い ductus の特徴を示している写本の多くは，クチャの近くの Ming-oi Qizil で発見されたものである（Winter 1955: 219–220）。

(21) Malzahn (2007) によると，文字の古い特徴を保持している写本は言語的に古い特徴をも示している。

(22) Peyrot (2008: 17): “A large part of the texts … come from the site of Šorčuq … and these texts are mostly of the same type. This Šorčuq type **<u>had become the standard</u>** for many scholars, so that in Sieg and Siegling's editions (1949, 1953), for example, forms fitting in this standard type were considered ‘regular’, whereas forms deviating from the Šorčuq type often received the note ‘sic!’.”（太字・下線は発表者）

(23) Winter (1955): 写本の発見場所をもとに，トカラ語 B を 3つの方言に分ける（西部＝Kucha，中部＝Shorchuk，東部＝Turfan）。写本の違いは方言の違いによるもので，時代の違いによるのではない。

(24) Stumpf (1990): 発見場所ではなくて言語の特徴をもとに，トカラ語 B の写本を4つの時代の層に分ける。

(25) Peyrot (2008) は Stumpf (1990) の説を検証するため，トカラ語 B のテキストを徹底的に調査した。その結果，写本の違いは Stumpf が主張したように時代によるものだと結論づけた。ただ，社会言語学的な意味で東部方言を認めてよいという。トルファン周辺で使われていた「東部方言」はトカラ語 B の最も遅い段階のもので，日常口語に近かったと考えられる。

(26) Peyrot (2008: 212): “Stumpf's theory of a chronological development is both **<u>confirmed and strengthened</u>** … the concepts of a western and a central dialect must be abandoned altogether, but the eastern dialect might be a practical designation as long as it is kept in mind that the eastern dialect is not genetically different from the colloquial language in the west.”（太字・下線は発表者）

(27) Peyrot (2008: 219) はトカラ語 B のテキストを archaic-I, archaic-II, classical, late, colloquial のタイプに分類している。最新のトカラ語 B の辞書 (Adams 2013) はこの分類を踏襲している。

4.2　例 II：韻律研究

(28) トカラ語のテキストの大部分は韻律の形式で書かれている。その多くは，12σ〜18σ × 4行の形式をとっている。

(29) Bross et al. (2014) はこれらの韻律を分析した結果，トカラ語の韻律は major および minor caesura の区別をもって，4σ + 3σ の間にある caesura は全て minor caesura であるということを明らかにしている。Bross et al. (2014) によると，major と minor caesura の別は違反の許容度にあるという。

(30) Bross et al. (2014: 19):

> “The relatively fragmentary state of the Tocharian corpus regularly requires editors to propose restorations. This can be done with a fair degree of accuracy, especially in cases where parallel texts in other languages exist, which often supply the approximate content of the lacunae. In addition to obvious restrictions such as the physical size of the lacuna in the manuscript, **<u>the meter constrains the number of possible restorations. The more exact understanding of the meters that we have arrived at requires</u>**

that editors review restorations that have already been proposed and check whether they respect the compositional practice of the Tocharian poets.”（太字・下線は発表者）

(31) THT 5 b1 の行は途中で切れており，Sieg & Siegling (1949: II, 10 no. 6) は *mäkte meski* | *śeśś(anmoṣ* ‖ *koklentse śänˈmānmasa)* のように，通常の caesura 位置に違反している語形を補っている。Bross et al. (2014) のデータから判断すると，この補いが正しいという確率は非常に低いと言える。

4.3　例 III：「浅い」再建 (shallow reconstruction)

(32) Adams (2013: vii), *A Dictionary of Tocharian B*:

> “Secondly, it [= this dictionary] is an **etymological dictionary** of the language and thus an aid to understanding the place of Tocharian within the Indo-European language family. Defining, translating, and **etymologizing**, particularly in a language as fragmentarily known as Tocharian B, are **not exact sciences; readers are cautioned to take the question marks and ‘possibly’s,’ etc., at full value** and should, no doubt, add many of their own.”（太字・下線は発表者）

(33) トカラ語は，印欧祖語の時代から 4000 年以上の隔たりがある。祖語まで「深い」語源を求めるアプローチは多くの場合，無益な議論で終わってしまう。いっぽう共時態を重視した「浅い」再建 (shallow reconstruction) の方が，言語学的に価値のある成果を出す場合がある。下にトカラ語 A からの一例を挙げる。

(34)トカラ語 A の comitative 接辞 *-aśśäl*。

(35) *tsopatsäṃ*　*kāruṇ-**aśśäl***　　*triwont*
great.OBL　compassion.OBL-COM　mixed.OBL
‘mixed with great compassion’ (A 63 b1, 訳は CEToM による)

(36) Kim (2014): TA *-aśśäl* < Proto-Tocharian *-*śä-yälæ* ‘to go together with’ < Proto-Indo-European *k^we ‘and’ + *$h_1$iló-* ‘go (gerundive)’。ただし， Proto-Indo-European *k^we ‘and’ (Vedic *ca*, Latin *que* など) のトカラ語における反映は今まで発見されていない。

(37) Koller (2016: 167): “[The TA comitative suffix] *-aśśäl* consists of the allative suffix *-ac* followed by the comitative adposition *śla.*”

comitative 接辞の内部構造
/-ac-śla/ → *-aśśäl*

(38) 前代の研究者は，トカラ語 A の allative *-ac* を “dative” と呼んでいた。この接辞は「与える」などの動詞の間接目的語を表示する（Koller *ibid.*）。

(39) 印欧祖語は8つの格を区別する格標識体系をもっていたが，トカラ祖語ではそのほとんどが失われた。そのかわり，トカラ語において斜格を支配する後置詞は豊富な二次的な格標識体系に発展した。

(40) Koller (*ibid.*) は，comitative/instrumental の前置詞は幾つかの言語で dative を支配することを指摘し（例えばドイツ語の *mit* ‘with’ + dative, 古代ギリシア語 *syn* ‘with’ + dative），トカラ語 A の comitative 接辞 *-aśśäl* の歴史的背景も同様に考えることができると主張している。つまり *-aśśäl* は，allative/dative *-ac* とそれを支配する *śla* ‘with’ の組み合わせとみなせる。

(41) Koller (*ibid.*) はトカラ語 A の共時態（後置詞の振る舞い）を重視することで，接辞 *-aśśäl* に対して説得力のある説明を与えている。また，*-aśśäl* に対応する接辞はトカラ語 B に在証されないので，この接辞の起源は前トカラ語 A (Pre-Tocharian A) の問題であって，Kim (*ibid.*) が想定しているようなトカラ祖語 *-*śä-yälæ* 'to go together with'，引いては印欧祖語 *k^we 'and' + *$h_1$iló- 'go (gerundive)' の問題ではない。

5　これからの課題

5.1　フィロロジーの重要性

(42) 近年のトカラ語研究は，印欧語比較言語学的な立場をとるものが多く，上で見たような，印欧祖語まで遡る「深い」語源・再建を提案するものは少なくない。しかし，通時的な問題を考える前にまずトカラ語を正しく理解する必要がある。十分に理解していない語やテキストはまだ数多く存在する。仏教学の知識，包括的なコーパス研究，精密な文献研究を取り入れた研究方法は，最も重要な課題だと感じている。文献を精密に調査し仏教学の知識を取り入れることによって，新しい語を発見できる。その一例を下にあげる。

(43) Sieg & Siegling (1953: 114) のテキスト・エディションでは，写本 B 197 a1 は *l(a)kle k· ly· p tsentar* と転写されている（括弧内は補い，· は 文字の一部が判読できない）。これをもとに，*tsentar*「置く」という動詞が多くの研究者に受け入れられている (例えば Malzahn 2010: 641–642)。*tsentar* が現れる写本 B 197 はアビダルマの解説書であり，非常に難解な文献である。百済康義の1974年の論文『トカラ語 B によるアビダルマ論書関係の断片について I. Abhidharmâvatāra-prakaraṇa 註』 により，B 197 は Abhidharmâvatāra-prakaraṇa というサンスクリット語で書かれたアビダルマ注釈書からの引用を含んでいることが判明した。仏教学の専門家である百済は1974年の論文で，注釈書や漢訳仏典を頼りにしながら，B 197 のトカラ語の大部分を翻訳し，その内容を正しく把握することに成功した。

(44) しかし，百済（*ibid.*）も *tsentar*「置く」という動詞を受け入れており，写本のこの部分を正確に捉えることができなかった。そこで Catt (2016) は，写本 B 197 a1 の *l(a)kle k· ly· p tsentar* という読みについて，問題を指摘している。*tsentar*「置く」が文脈に合わないことや，*-p* で終わる語彙が少ないことなどから，Catt (*ibid.*) は *tsentar* ではなく，*ly(i)ptsentar*「残す・取り除く」と読むべきと主張している。

(45) Catt (*ibid.*) によると，*ly(i)ptsentar*「残す・取り除く」は，語根 *lip-* から作られた現在形である。今まで，語根 *lip-* の現在形として認識された形式は自動詞の *lipetär*「残る」だけであったが，*ly(i)ptsentar* は接辞 *-s-* をもつ他動詞形である。

(46) 百済の精密なフィロロジー研究があってからこそ，このような新語の発見が可能となった。語源だけでなく，トカラ語テキストの内容をより正確に理解することがトカラ語研究の最も重要な課題である。

5.2　CEToM プロジェクトの紹介

(47) CEToM = A Comprehensive Edition of Tocharian Manuscripts: <http://www.univie.ac.at/tocharian/?home>。Department of Linguistics, University of Vienna が管理。

(48)「このプロジェクトの目的は、写真とローマ字転写、そして言語・文献学と文化に関する解釈を含む英訳の提示で、トカラ語文書のすべてを、関心を持つ誰にでも利用可能にすることです。文書資料は、文法的ならびに文献学的な、様々な検索オプションを利用いただけるデータベースの形で提示されます。本プロジェクトは、オーストリア科学基金のSTARTプログラムにより支援されています。2011年2月開

始され、予定実施期間は6年間です。」(CEToM <https://www.univie.ac.at/tocharian/?home_ja>より，一部を修正)

(49) 今までできなかった，大規模なコーパス研究が可能となった。例えば，上で紹介した Bross et al. (2014) の研究は CEToM なしでは行えなかった。また，例えばトカラ語 B 写本の時代区分を意識した通時的な研究やトカラ語資料におけるサンスクリット語からの借用の包括的な研究も可能となった。

参考文献

Adams, Douglas Q. (2013) *A Dictionary of Tocharian B*. 2nd edition. Amsterdam & New York: Rodopi.

Bross, Christoph, Gunkel, Dieter, and Ryan, Kevin M. (2014) Caesurae, Bridges, and the Colometry of Four Tocharian B Meters. *Indo-European Linguistics* 2: 1–23.

Catt, Adam A. (2016) Tocharian B *ly(ĭ)ptsentar*: A New Class VIII Present. *Tocharian and Indo-European Studies* 17, 11–27.

CEToM = *A Comprehensive Edition of Tocharian Manuscripts*, URL: http://www.univie.ac.at/tocharian [2018年8月30日閲覧].

Fortson, Benjamin W. IV. (2010) *Indo-European Language and Culture: An Introduction*. 2nd edition. Oxford, U.K. & Malden, MA: Wiley-Blackwell.

Jasanoff, Jay H. (2003) *Hittite and the Indo-European Verb*. Oxford: Oxford University Press.

Kim, Ronald I. (2012) *Introduction to Tocharian*, URL: http://enlil.ff.cuni.cz/system/files/tocharian.pdf [2018年8月30日閲覧].

Kim, Ronald I. (2014) Ablative and Comitative in Tocharian. In Norbert Oettinger and Thomas Steer (eds.), *Das Nomen im Indogermanischen. Morphologie, Substantiv versus Adjektiv, Kollektivum. Akten der Arbeitstagung der Indogermanischen Gesellschaft vom 14. bis 16. September 2011 in Erlangen*, 129–139. Wiesbaden: Reichert.

Koller, Bernhard (2016) On the Internal Structure of the Tocharian A Comitative Suffix. In David M. Goldstein, Stephanie W. Jamison, and Brent Vine (eds.), *Proceedings of the 28th Annual UCLA Indo-European Conference, Los Angeles, November 11th and 12th, 2016*, 167–184. Bremen: Hempen.

Malzahn, Melanie (2007) The Most Archaic Manuscripts of Tocharian B and the Varieties of the Tocharian B Language. In Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta Tocharica*, 255–297. Heidelberg: Winter.

Malzahn, Melanie (2010) *The Tocharian Verbal System.* Leiden & Boston: Brill.

Peyrot, Michaël (2008) *Variation and Change in Tocharian B.* Amsterdam & New York: Rodopi.

Sieg, Emil and Siegling, Wilhelm (1908) Tocharisch, die Sprache der Indoskythen. Vorläufige Bemerkungen über eine bisher unbekannte indogermanische Literatursprache. *Sitzungsberichte der Berliner Akademie der Wissenschaften 1908,* 915–934.

Sieg, Emil and Siegling, Wilhelm (1921) *Tocharische Sprachreste.* I. Band: *Die Texte, A. Transcription. B: Tafeln.* Berlin & Leipzig: de Gruyter.

Sieg, Emil and Siegling, Wilhelm (1949) *Tocharische Sprachreste: Sprache B.* Heft 1: *Die Udānālaṅkāra-Fragmente. Text, Übersetzung und Glossar.* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Sieg, Emil and Siegling, Wilhelm (1953) *Tocharische Sprachreste: Sprache B.* Heft 2: *Fragmente Nr. 71–633.* Aus dem Nachlaß herausgegeben von Werner Thomas. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Stumpf, Peter (1990) *Die Erscheinungsformen des Westtocharischen: Ihre Beziehungen zueinander und ihre Funktionen.* Reykjavík: Málvísindastofnun Háskóla Íslands.

Winter, Werner (1955) A Linguistic Classification of "Tocharian" B Texts. *Journal of the American Oriental Society* 75(4): 216–225.

Yoshida, Kazuhiko (forthcoming) On the Prehistory of Hittite *aušta* and *maušta*. To appear in a festschrift.

百済康義（1974）「トカラ語 B によるアビダルマ論書関係の断片について I. Abhidharmâvatāra-prakaraṇa 註」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第 13 集：21–36.

新村恭（2017）『広辞苑はなぜ生まれたか：新村出の生きた軌跡』京都：世界思想社.

辻直四郎（1935）「On the Designation-Problem of the So-called Tokharian Language」藤岡博士功績記念会（編）『言語学論文集：藤岡博士功績記念』7–72. 東京：岩波書店.

辻直四郎（1953）「トカラ語研究の近況」『東洋学報』35(3/4): 101–121.

吉田和彦（2005）『比較言語学の視点：テキストの読解と分析』 東京： 大修館書店.